

「居場所」

富山教区 婦負東組 妙順寺、竹中了祥と申します。

みなさんの一日は何で始まりますか？ラジオ体操やウォーキング、朝食、畑仕事。色々な一日の始まりかたがあります。

私は京都で、僧侶になるための学校に通っていました。通いと言っても、学校から100メートルほどしか離れていない、寮からの通学です。寮での生活は「自由って何？それ、おいしいの？」というくらい時間に追われる生活でした。そこでの一日は、掃除で始まります。雑巾で水ぶきをしたり、モップやほうきでほこりを掃いたりします。

掃除はみなさんにとっても身近なことではありませんか。小学生の頃や中学生の時に掃除当番が課せられていたと思います。学校で生徒が掃除をするという日課は、教育の場によく馴染み、どこの国でも行われていることだろうと考えますが、違うのです。実は仏教の教えが根づいた国や地域だけで行われていることなのです。

日本では寺子屋の時代から、生徒に掃除当番というものがありました。広島大学の沖原豊 元学長の著書、『心の教育』によりますと、ヨーロッパ、アメリカなどキリスト教圏の諸国と、イスラム教の国々には掃除当番がないそうです。これらの国では古代から、掃除は召使の労働という観念があります。ですから学生は掃除をしない習慣だといえます。一方、日本、韓国、北朝鮮、中国、タイ、ビルマ、インド、スリランカなどでは、掃除当番があります。これらの国々は仏教の影響を受けたところなのです。

と言っても、掃除をすすんでする人とそうではない人がいます。

掃除という行為を教育の面から実験された方がいました。アメリカ・ノースウェスタン大学のリチャード・ミラー博士の研究グループは、シカゴにある公立小学校の五年生たちに、ゴミを片づけさせる実験をしました。

あるクラスの子ども達には「みんな、とてもキレイ好きなのね」「このクラスの子たちはゴミを散らかさない生徒ばかりなのね」と褒めるように担任の先生に頼みました。別のクラスの子ども達には「どうしてゴミを散らしてはいけないのか？」ということ無理屈っぽく講義形式で教えました。

どちらのクラスがゴミを散らかすことなく片付けることができたのでしょうか。実験を始める前には、ゴミ箱にゴミを捨てることができたのはどちらのクラスとも、約二十%の生徒達だけでした。「みんなとてもキレイ好きなのね」と褒めたクラスは八十%の生徒がきちんとゴミ箱にゴミを捨てるようになりました。もう一方の「どうしてゴミを散らかしてはいけないのか？」と講義形式で教えたクラスは、四十五%の生徒しかゴミ箱に捨てるようになりませんでした。

「褒める」という行為と「無理屈で教える」という行為で受ける側の印象が全く変わってきます。その大きな違いは何か。「無理屈で教える」場合は、言いかえれば、「今のあなたではダメなのです」という教え方になります。「褒める」場合では、「今のあなたもいいですね」という教え方になります。つまり、この二つの大きな違いは相手を認めるか認めないかの違いなのです。

掃除当番は仏教の影響を受けていると言いましたが、源流をさかのぼれば、チューラパンタカという人物にたどりつくといわれます。お釈迦さまのお弟子で、掃除をし続けて覚りを開かれました。チューラパンタカはモノを覚えるのが苦手な人でした。自分の名前も忘れてしまうくらいでした。自分の情けなさに途方に暮れていた時にお釈迦さまは言いました。「自分が愚かであると気づいている人は智慧ある人なのです。愚かであるのに賢いと思っている人こそ、本当の愚か者なのです。」と説かれたのでした。そして、お釈迦さまは一本のほうきを渡します。「ちりを払わん、あかを除こう」と称えながら掃除をするように言いました。チューラパンタカは来る日も来る日もそのことばを称え続け、ついには覚りをひらき、仏教の教えを支えとして生きぬいていられました。

チューラパンタカにとって、人生の分岐点は、お釈迦さまのおっしゃられた「自分が愚かであると気づいている人は智慧ある人なのです。」というお言葉でした。もの覚えが悪かったことで、誰も認めてくれることはなかった。そんな自分を唯一認めてくださったのがお釈迦さまでした。認めてもらったことでチューラパンタカは自分の居場所を見つけ、生きる意欲につながっていったのではないのでしょうか。

人間は認められたいと思って生きています。逆に言えば認めてもらえないと生きていく価値を見いだせないとも言えるように思います。認められることで人生に居場所を感じていくということです。それは、認められる人間になりましょうということではありません。人間ひとりひとりが、人を受け入れ認めていく姿勢が問われるということです。生まれたてのいのちも、病に苦しむいのちも、老いに悩むいのちも、どんないのちであっても、いのちに代わりはないのです。

私自身の生き方を省みますと、人を認める生活は送っていないように思います。つまり人の居場所を奪い続けているのです。人を認めていかず居場所を奪っていく生活は、そのまま自分自身の居場所を奪っていくということになるのです。

阿弥陀仏は、すべてのいのちが幸せであってほしいという願いを建てられたといただいています。阿弥陀仏の願いに自分の生き方の有りようを見つめていきたいものです。